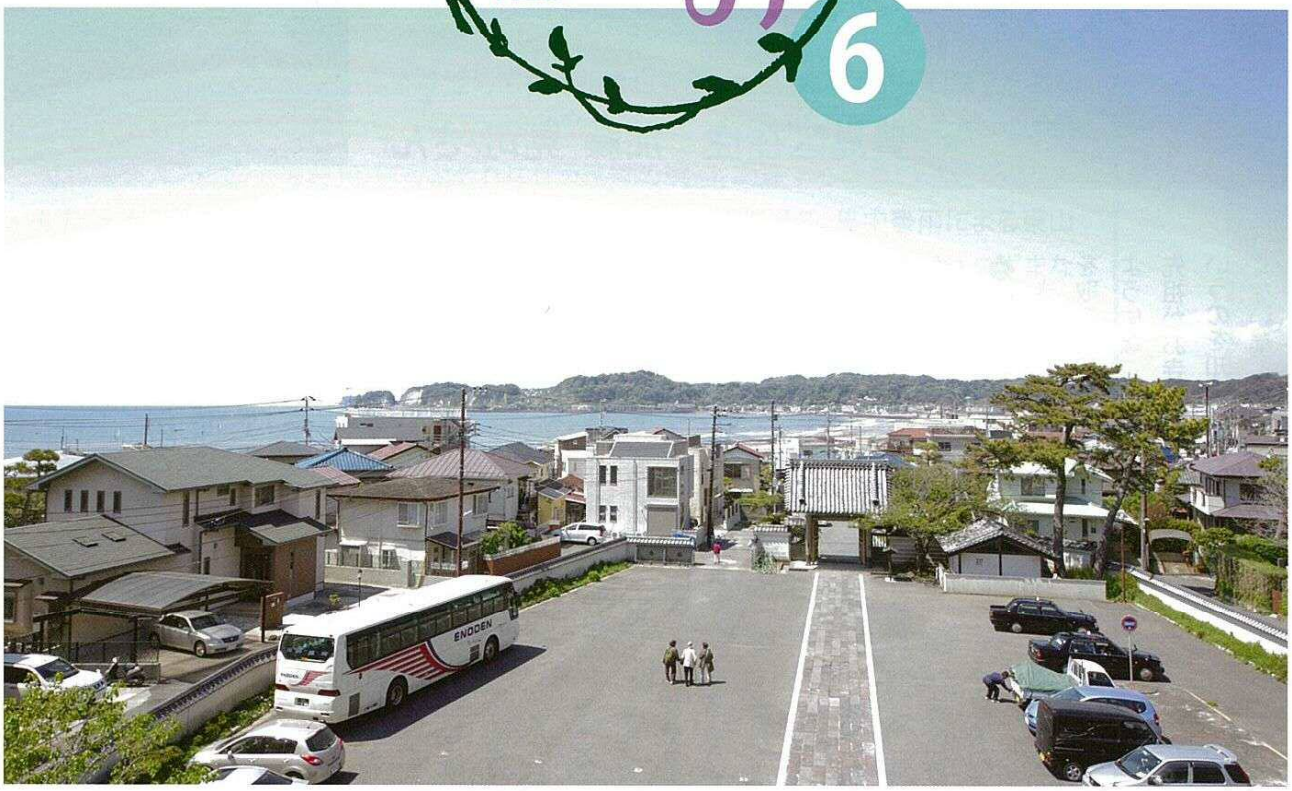
南無阿弥陀仏は
私のいのち

えこお
平成25年
6月号
NO. 425

〒110-0012 東京都台東区竜泉 1-20-19
発行所 真宗 佛光寺派 西徳寺
TEL 03-3875-3351 FAX 03-3875-6796
http://saitokuji.tobiiro.jp/
発行人 岸本 秀一
印 刷 日生印刷(株) 03-6863-3263



アナタの白子に戻り鰹

「千葉県浦安市内で鮮魚店を営む異色のロッカー、森田釣竿さん(三十八)が、映画「アナタの白子に戻り鰹」に初主演、スクリーンデビューを果たした。漁師町の面影を残す浦安でオールロケした人情喜劇。エンジン全開で快演している。映画は新宿で上映中で、近く浦安市内でも上映会を計画している。」

右は産経新聞四月十七日の紹介記事である。

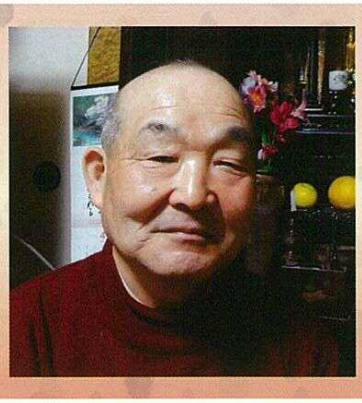
この映画を製作したのは今井真監督(二十六)である。と言っても「えこお」読者は、「だれ?」と思うかも知れない。実は昨年の西徳寺での二日間に亘る「親鸞聖人七五〇回大遠忌法要」の記録ビデオを撮って下さった監督である。このビデオはすでに完成し、五月中に完成見込みの『西徳寺物語』(書籍)と同梱でご門徒に発送の予定になっている。

話を新聞記事に戻すと「映画制作が浮上したのは、若手の今井真監督が浦安魚市場を訪れた昨年十二月だった。そこで出会った森田さんの強烈な個性と浦安の風情に惚れ込んだ。森田さんは、ロックバンドでボーカルを担当し「魚食文化の復権」を目標に活動。日本武道館でのライブでマグロを解体した伝説を誇り、ファンは「船長」と呼ぶ。」と。

「笑いと哀愁。人情喜劇です。でも、正直、上映するまでは(観客の反応が)怖かった。みんな、笑ってくれた。ねらいは、はずれていなかった」と監督は語る。西徳寺で上映する機会を持ちたいと思う。

群生海

共に学ぶ



豊島区在住　加藤 晃司 さん

今回は、現在豊島区にお住まいの加藤晃司さんにお話しを伺いました。

◆西徳寺とのご縁

そもそも西徳寺さんとのご縁は、母が亡くなったときなんですよね。実は、たまたま結婚した相手がお寺の娘でね、私のことをいろいろ調べられたんですよ。それで初めて、自分の先祖が福井県にある、佛光寺派のお寺の門徒だと知らされたんですよ。

ある時、会社の部下の結婚式で福井に行ったときに、ついでに先祖のお墓参りをしようと思ってお寺に行ったんです。そのときに住職さんが、「東京には佛光寺派は少ないけど別院があるから」ということで、その場で電話してくれてね。それから母が亡くなって、西徳寺さんでお葬式をしてもらったのが初めですね。

◆聞法会に参加するきっかけ

きっかけはやっぱり、だんだん年を取ってきて、勉強したいなと思うようになったことですかね。また、先祖がお寺のために尽くされたというのを知って、私がしないのはよくないなと思って。

たまたま家内の実家がお寺だったということもあって、仏教に関心をもったということもあるかな。

◆聞法会に参加して

とにかくすごく気分がいいんですよね。話は難しくてよくわからないところはありますが。その場にいるだけで心が落ち着き、清々しい気分になるんです。参加されている方々も気さくに話しかけてくださるし、本当に楽しいですね。

聞法会に参加して、自分とは違った人生を送ってこられた方々と話をすると、自分の知らなかった世界を知ることが出来、今までの自分を見直すきっかけになりましたね。そういう意味で聞法会に参加して、いろんな方と話すのはすごくいいですね。

◆これからの願い

今、息子が三十八なんだけど、一緒に住もうといってくれてね。近々息子の家族と一緒に住むんですよ。そしたら私の後を継いで、仏壇を守ってもらいたいですね。そして時期が来たら、息子を聞法会に連れて行きますよ。で、どんどん勉強してもらいたいですね。

※城北ブロック聞法会会員です。

（蓮井 邦宗 記）

えこお志お礼

ご浄財を頂戴いたしましてありがとうございます。ご芳名の掲載をもってお礼とさせて頂きます。

滋賀県　東光寺 様

台東区　大林 藤枝 様

新宿区　赤堀 徹 様

仏教青年会総会

4月23日に仏教青年会総会が行われました。前年度の活動や会計について報告し、今年度の行事予定について話し合いました。

今年も「歎異抄（たんにしょう）」を中心に宗正元（そうしょうげん）先生よりお話をいただく他に、研修旅行や映画会、バーベキュー大会にレクレーションを予定しております。詳しいことは「えこお」にて順次お知らせいたしますので、初めての方もぜひ一度お越しください。

「信を獲て」とは、自分中心の在り方が教えられ、阿弥陀仏の願に生きる歩みをいただくことです。それで、信心を獲得すると、如来の徳をいただいて「見て敬う」生活が始まると言われます。真宗の門徒が、家族全体のお敬いの場として、ご本尊を安置し、『正信偈』をお勤めしてきたのは、いつも自分をよしとすることの誤りに気づき、お敬いの生活を、身につけようとしてきたからでありましょう。

聖徳太子は、十七条憲法の第二条に、「篤く三宝を敬え。三宝とは仏、法、僧なり。即ち四つの生の終わりの帰、万の国の極めの宗なり。(『十七条憲法』)」といわれます。敬いとは、権力や財産や才能を敬うのではありません。また、敬うといって相手を別格にしたり、敬うことで自分の都合のいいように利用するのでもありません。篤く三宝を敬うのは、三宝に帰依することで、いのちよりも尊いよりどころにふれる南無阿弥陀仏のこころです。それで、三宝を敬うことが、万の国の極めの宗であるといわれます。だから、親鸞聖人は、聖徳太子を「和国の教主」とあがめられ、「父のごとく、母のごとく」と敬われます。

すでに、お釈迦様は、「法を聞きて能く忘れず、見て敬い得て大きに慶べは、則ち我が親友なり(『大無量寿経』)」と、如来の徳をいただいて、見て敬う者は、我が親友とまでいわれていました。それで、自分の思いがひるがえされて敬うことのできた感動、この世界に卑しむべきものは何一つなかったという慶びを、「大慶喜」といわれます。

正信偈の話㉒

松井憲一

獲信見敬大慶喜　即横超截五悪趣。

(信を獲て見て敬い大きに慶喜すれば、即ち横に五悪趣を超截す。)

こうして、南無阿弥陀仏において、すべてを友なり師なり仏なりと出遇える大慶喜の人は、足下に「即ち横に五悪趣を超截す」るといわれます。五悪趣とは、地獄(苦しみのもっともひどい状態)・餓鬼(欲に欲をかさね、いつも飢えに渇いている状態)・畜生(恥も外聞もなく本能のままに動いている状態)・人間(自分の見解でいつもものごとをおしはかっている状態)・天上(ひとりよがりの楽しさにいい気になっている状態)の五つの迷いの世界のことです。受験地獄・就活地獄と苦しめば、合格・入社して有頂天という天上界へ昇る。旅の恥はかきすてと畜生道顔負けの放蕩によいしれては、餓鬼の心で持ち切れぬほどの土産物まで買いあさり、やはり家が一番気楽で落ちつくと人間界にもどる。こうして、五つの迷いの世界をめぐって一喜一憂しているのが、私たちの日常生活です。

この惨めな行きつもどりつという流転の世界を、「横に超截す」るのが、南無阿弥陀仏に賜わる生活です。横は、親鸞聖人が、「横はよこさまという、如来の願力なり、他力をもうすなり、超はこえてという。生死の大海をやすくよこさまにこえて、無上大涅槃のさとりをひらくなり(『尊号真像銘文』)」といわれるように、如来のはたらきをあらわします。つまり、流転の世界は、どれほど努力を積み重ねても、たち切れるものではありません。だから、如来の法が横さまに超えてわたしに響き、すべては幻であると截断されて、夢から覚めるのです。それを、「横に五悪趣を超截す」といわれるのです。太陽が昇れば、闇は去って光は室内に充満します。どこへ向かっても閉ざされていたかたくなな自分中心の心が、教えによって照らされ知らされれば、迷いの世界は自然に閉じ、すべてを善き友とあいみる新しい生活がはじまるのです。この真の人としての歩みを、「獲信見敬大慶喜、即横超截五悪趣」と、讃えられたのです。

山門の言葉

自愛は最大のへつらいである

ヴォルテール

私達は、日々の生活の中で「自愛」ということを意識して暮らしているわけではないが、実際には「自愛」が中心となって暮らしているのではないだろうか。他の言葉に言い換えるならば、「保身」と言えるようにも思う。

私達一人一人は様々な環境に身を置き生活をしているわけだが、その環境に於いて、自分の立場が危ぶまれないかどうかを気にしながら生活している。学校や職場、ましてや落ち着ける場所であるはずの自宅までもが、自分の立場を気にしながら生活しているということが言えるのかもしれない。

すでに述べたことだが、このように全てに於いて意識し生活しているわけではないが、振り返ってみると、それこそ自分のことだけを考え、立場を守るような在り方でしかないことに気づかされる。それを「自愛」という言葉で言い表されているのではないだろうか。

そしてその「自愛」がへつらいであると言われることに驚く。なぜならば、自分自身を守り抜こうと必死であることが、実は自分を取り囲む環境に迎合していくということだからである。自分を守るという時には、自己主張が強くなると思っていたが、実際には周りに嫌われないように、悪者にされないようにと周りに気を使うことで自分を守っている。

曇鸞大師は「遠離自供養心（おんりじくようしん）（自らを供養する心を遠離する）」と言われる。自分の為だけに生きる私達に、その心から離れることを願われた言葉である。私達は自分の心を中心にして生きていることに疑問を持たないが、実はその心によって悩み苦しみが起きてくる。「自分の為に」ということが中心であるが故に、環境に振り回され自分自身にも振り回され、気づいてみれば何処にも頼るものがない。

そのような私達の在り方を教えて下さるのが今回の言葉であり、本当に依るべきものを勧めて下さるお念仏のはたらきが表れているように感じる。

（大橋　伊知郎　記）

日誌

4月13日	同行会総会　「正信偈の教え」に聞く 法話　大橋 伊知郎
4月16日	企画委員会
4月17日	婦人会創立三十周年記念総会 （参加者53名）
4月20日	定例聞法会 混声合唱団「エコー」練習
4月23日	仏教青年会総会
4月24日	教行信証「信巻」に聞く（第87回） 講師　宗正元師
4月27日	同行会「正信偈の教え」に聞く 法話　高橋 淳
4月27日・28日	宗祖忌
4月30日	真宗教団連合　（岸本住職 参加）
5月7日・8日	中興忌
5月10日	企画委員会
5月11日	混声合唱団「エコー」練習 同行会「正信偈の教え」に聞く 法話　蓮井 邦宗
5月12日	城西ブロック会総会・聞法会 （中野商工会館　参加者18名）

ご苦労さまでした。お帰りなさい。

3期12年間に亘って真宗仏佛寺派の宗務を担当してきた大谷義博師が任期満了をもって、去る4月15日総長職を退任しました。師の就任に当たってかけられた宗派の願いは「宗祖親鸞聖人750回大遠忌」の執行とそれに伴う慕財の調達、関連する事業の遂行でありました。しかし残念なことに、任期中には、突然の門主（前門主）の退任、集中豪雨による東山佛光寺本廟の墓地擁壁の崩壊、そして大遠忌直前の東日本大震災の発生、などさまざまな困難に遭遇することとなりました。師は「大遠忌で震災物故者の追弔法要を勤めるなど、皆さんのご協力で一つの方向に力を合わせることができた。21億6千万円規模の大遠忌になったのも、一にも二にも皆さんの親鸞聖人への御恩の表れ。それが一番ありがたい」と言う。任期中の事業は大師堂大屋根の大修復、集会所（すえしょ）の新築等の建築ばかりではなく、真宗聖典、聞法テキスト等の各種出版も手がけ、更には宗門の将来を見据えた派内法規の改変整備を行いました。また真宗他派はもちろん真宗以外の他宗派との交流も深めたことでした。にも拘らず師は「やり遂げたというより、未完成の感じ。積み残したことも多い」と語り、そして「就任中は大遠忌の円成に集約される。小異を捨てて大同に帰す形で、全国のご寺院から協力を頂いた。それは内局の功績ではないし、個人の能力でもない。門信徒全体の力が結集されたことに尽きる」と振り返られます。ともかくも12年間ご苦労様でした。

今後は西徳寺最高顧問として聞法活動をはじめ、西徳寺の運営に付きましてもご指導頂く予定であります。

掲示板 平成25年6月

1日(土)　午後2時　**評議員会定例役員会**
　　午後3時半　**混声合唱団「エコー」練習**
15日(土)　午後1時半　**定例聞法会**
16日(日)　午後2時　**城北ブロック会総会・聞法会**
　　(川口リリア)
19日(水)　午後1時　**婦人会聞法会　本山リーフレットに聞く**
　　「ブタとイノシシ」
22日(土)　午後3時半　**混声合唱団「エコー」練習**
　　午後6時　**同行会「正信偈の教え」に聞く**
　　法話　岸本住職
23日(日)　午後3時　**評議員会総会**
25日(火)　午後7時　**仏教青年会映画会**
26日(水)　午後1時半　**教行信証「信巻」に聞く(第89回)**
　　講師　宗　正元師
30日(日)　午後2時　**城東ブロック会総会・聞法会**
　　(人形町　香港美食園)

西徳寺が変わる！

今年1月、岸本住職からの発案によって「企画諮問委員会」が発足、すでに4回の会合を重ねてきました。西徳寺の寺院活動、主に聞法会の将来を見据えて、どうしたら活性化させることができるのかを課題に元責任役員の木村一郎様、責任役員の今井正之様、総代の青柳庄一様、評議員会から会長の竹内乾一郎様をはじめ安田琢磨様・本間明様・本間和夫様の7名にお願いいたしました。

企画諮問委員会ではこれまでの会議を通じて、西徳寺に参詣される方に率直なご意見を伺い、今後の聞法活動に反映させていただくことを考えております。先ず手始めに、春のお彼岸には出かけていく聞法会の案内パンフレットと、聞法会に参加したことのない門信徒に呼びかけるチラシを配布しました。出かけていく聞法会では、ブロック会毎にアンケートお配りし、貴重なご意見をいただきました。

このたびは来月のお盆に墓参されるすべての方々に、アンケート調査を実施させていただきたくご案内申し上げます。日頃、お寺に対して感じていることや疑問など、忌憚のないところをお答えいただきたいと思っております。また、一緒に参詣されるご家族やご親族にもご協力いただきたいと思います。

来年は「出かけていく聞法会」が30周年を迎えます。これからの聞法会をより発展させるための大きな機縁として意義のあるものとさせていただきたく、門信徒の皆様にもご協力をお願い申し上げます。　(木村 専正 記)

地獄の釜の蓋が開く

お盆にはご先祖さまが帰ってくるといいます。

そう言えば、昔、胡瓜や茄子に割り箸を刺し、馬のような乗り物にしてお仏壇にお飾りしてあるのを見たことがあります。また今でも見かけますが、7月13日の夕方、迎え火を焚き、7月16日午前に送り火を焚いたりしています。特に京都の左大文字等にみられる「五山の送り火」(8月16日)は有名です。

ところで、いったいご先祖さまはどこから帰ってくるのでしょうか。

お盆の行事は、仏教に起源を持つと思われていますが、実は仏教が日本に伝わる以前からあった風習で、先祖の霊魂が家族のもとへ帰ってくるという行事がすでに行われていました。それが仏教伝来によってもたらされた『盂蘭盆経(うらぼんぎょう)』というお経と結びつき、今のような行事になったようです。

ただ「お経」では家族のもとに霊魂が帰ってくるとは説いていません。お釈迦様の弟子である目連尊者の母が餓鬼(がき)道から大勢の人と共に救われたという話なのです。(『えこお』No413参照)

こどもの頃「お盆には地獄の釜の蓋が開く」とか「お盆に海で遊んだら地獄に行くぞ」とよく聞かされましたが、亡くなられたご先祖さまは普段は地獄にすんでいて、お盆は留守になるので、ご先祖さまの代わりに呼ばれるのかとも思いました。

これらお盆にまつわる事柄に共通するのは、霊魂が有るという前提に立つ話であることです。仏教では霊魂の有無については「無記」といい、霊魂の有無について答えていません。霊魂の有無に振り回されて、自分を見失ってはいけないと教えます。

亡くなった方々は、ご先祖さまを含め、私どもを導いて下さった諸仏であります。お内仏(お仏壇)に手を合わすとき、在りし日の面影や言葉が思い出され、私自身を励ましてくださいます。つまり亡き人は霊魂ではなく、教えとなって導いて下さるのです。

編集後記

ニュース番組の特集で「出生前診断」について取り上げていました。妊娠中に胎児の異常の有無を判定して、異常が判明した場合でも出産を望む意思があるのか、担当医がその決断を迫るというものでした。

生まれつき障害を抱えて生きておられる方のご苦労をはかり知ることは出来ませんが、何でもわかってしまう世の中を生きている、そのことに違和感なく暮らしていることに言い知れぬ不安がこみ上げてきました。　(主任 木村 記)

西徳寺ホームページアドレス：
HP http://saitokuji.tobiiro.jp/
ゆうちょ銀行お振り込み口座　00120-0-80670 名義 西徳寺

※「えこお」に対してのご意見・ご感想をお寄せ下さい。
(メールでも結構です)
saitokuji@ce.wakwak.com